

## P2-070

## 養護教諭養成課程における学修内容とその評価・効果に関する文献検討

山本 裕子

新見公立大学 健康科学部 看護学科

## 【目的】

文部科学省が提示する養護教諭の役割には、学校保健情報の把握、保健指導・保健学習、救急処置及び救急体制、健康相談活動、健康診断・健康相談、学校環境衛生、保健室運営に関する等多くの内容が挙げられている。これらより、近年の子どもを取り巻く社会状況の変化に合わせて養護教諭がさらにその専門性を高めることが求められている。しかしながら、現在の養護教諭養成には教育系、看護系、福祉学や栄養学などの科目とともに学ぶ学際系など様々な教育課程があり、養護実習に関してはその内容を各養成大学に委ねる等、養護教諭の質が保証されている状況ではない。どの教育課程においても養護教諭の質を保障することは重要である。そこで本研究では、養護教諭養成課程の学修内容に焦点を当て、その評価と効果、今後の課題を明らかにしていくことを目的に文献検討を行った。

## 【方法】

1) 医中誌Webを用い、「養護教諭養成課程」のキーワードで、原著、過去10年間で文献検索を行った。また学校保健研究より目的に合う内容の文献を過去10年間で検索した。  
2) 抽出した文献から内容が目的と異なるものを除外した。

## 【結果】

医中誌Webでは22文献、学校保健研究では3文献の合計25文献を分析対象とした。対象文献の内容を分類した結果、《養護教諭に必要な知識・技術》《学修の工夫と効果》《実習からの学び》《実習における課題》《救急処置への不安》となった。《養護教諭に必要な知識・技術》では、子どもに多い疾患の知識、フィジカルアセスメントなどが挙げられ、《学修の工夫と効果》では、シミュレーターの使用やロールプレイングの学修効果が挙げられ、《実習からの学び》では、コミュニケーションの重要性、子どもだけでなく保護者も含めた対応の重要性などが挙げられ、《実習における課題》では、大学間で臨地実習の日数に大きな違いがあること、実習先の確保や開拓などが挙げられ、《救急処置への不安》では、「観察」「分析・判断」のフィジカルアセスメントが挙げられた。

## 【考察】

養護教諭養成大学では、専門性を高めるため学修における多くの工夫がなされていた。特にフィジカルアセスメントについては問題意識が高く今後の課題も多く示されていた。今後はフィジカルアセスメントに加え、養護教諭に求められている保健指導や健康相談活動における学修内容や実施にあたっての課題も明らかにしていく必要がある。

## P2-071

## 学校救急処置におけるバイタルサイン観察の活用－養護教諭の臨床判断能力育成への取り組み－

山田 玲子<sup>1</sup>、岡田 忠雄<sup>1</sup>、葛西 敦子<sup>2</sup>、福田 博美<sup>3</sup>、佐藤 伸子<sup>4</sup><sup>1</sup>北海道教育大学 養護教育専攻 医科学看護学分野<sup>2</sup>弘前大学 教育学部 教育保健講座<sup>3</sup>愛知教育大学 養護教育講座<sup>4</sup>熊本大学 教育学部 養護教諭養成課程

## 【背景と目的】

子供たちが多くの時間を過ごす学校では、予期せぬ状況で傷病や事故が発生し、それを未然に防ぐことは困難である。そのため、学校における救急処置は児童生徒の生命や安全を守るために重要である。養護教諭はその主要な職務の一つに救急処置があり、学校での救急処置場面では、バイタルサイン観察等を行うことから児童生徒の傷病に対して臨床判断を行い適切な処置対応につなげている。しかし、その養護教諭の臨床判断については、そのプロセスも含めて明確にされていないのが現状である。そこで今回、高等学校養護教諭に行ったバイタルサイン観察に関する質問紙調査の自由記述を分析することから、学校救急処置でのバイタルサイン観察の活用事例の分析と養護教諭の臨床判断のプロセスを探索することを目的として研究を行った。

## 【方法】

A地域の高等学校に勤務する養護教諭314人に質問紙を郵送し、「学校救急処置でのバイタルサイン観察の活用」に関する自由記述に回答のあった119部を分析対象とした。実施時期は2018年1月であった。計量的テキスト分析ソフト「KH Coder(Ver.3Alpha.13m)」へ自由記述を入力し、単純集計後に頻出語分析および共起ネットワーク分析を行った。

## 【結果と考察】

救急処置でのバイタルサイン観察に関する記述を単純集計したところ、300文、148段落、総抽出語数6930語であった。頻出語のうち上位20語は「生徒」「救急」「VS(バイタルサイン)」「判断」「観察」「呼吸」「思う」「場合」「測定」「意識」「有用」「受診」「血圧」「脈拍」「体温」「倒れる」「必要」「発作」「緊急」「保護」であり、意識に関連する事例でバイタルサイン観察を行っていることが推察できた。また、共起ネットワークでは、「アレルギー」と「目安」、「アナフィラキシー」と「起こす」、「脳貧血」と「安心」、「骨折」と「疑い」、「内科」と「訴え」等も共起していた。頻出語分析および共起ネットワーク分析から、多くの救急処置でバイタルサイン観察が活用されていたことが確認でき、養護教諭が学校救急処置時に行う臨床判断において特に意識に関連する事例でバイタルサインの観察が有用であったと省察していると考えられた。

本研究はJSPS科研費17K04835および17K12564の助成を得て実施された。